

文芸

俳句

声はずむ筍と飯炊けました 池田 逸子
 納屋に打つ正午の時報木の芽晴 伊藤 敬子
 白無垢や薰風そよぐ雅楽の音 今関満喜子
 肩車はしやぐ子の手に藤の花 魚地 照子
 轉りに乗りたる筆の走りかな 江森 悦子
 たかんなの一夜に伸びる藪深し 川島 孝夫
 暮れなずむ風の色にも五月かな 川島 通則
 花筏分けてボートを漕ぎにけり 向後 寛
 花筏渡らや給え地蔵尊(友の計に) 越川せつ子
 手品師に心奪はれ花舞台 小松 藤男
 春日傘たたみて投げろお賽銭 佐瀬 輝夫
 憂き心蒲公英の野に捨てにけり 宍倉 道子
 一村を貫く水路五月かな 鈴木とし子
 母も居る畑のはずれの花胡桃 鈴木 利子

卯浪立つあかぼつけという唄

玉虫 栗扇

空と地と田の面に映えて五月来る

土屋美枝子

水張田に浮かぶ白雲五月来ぬ

土屋 義昭

筍を茹で父母の恩に謝す

戸村 静華

いつの間にツファにもたれ春の夢

西崎さち子

簪えたつあけぼの杉の芽立ちかな

早川 勇

短歌

兵役の体験なくも老人クラブの
 総会に歌ふ同期の桜 佐瀬 初音
 ポリウムを上げてモーターの四十番
 聴みていつか心晴れゆく 田崎 尚美
 園児らの乗りたるバスが走りきて
 孫待つ吾の前に止まりぬ 押尾 輝子
 食物と植物との使い分け
 アナウンサーの言葉怪しも 青木 秀子
 姪よりのみやげの財布内側が
 擦り切れたるも未だ使へり 芹川 初子
 手の平に桜の花びら受けむとし
 半時余り遊びるにけり 池田 春江

窓越しに眼に入る牡丹の伸び速く

はやも花芽を抱きあふるなり

吉岡 信子

四月末桜に出会いし水上は

桜前線今通るらし

西山満里子

パンクパーオリンピックの開催に
 日の丸の旗大きく揺るる

平山 芳子

小雨降る石段を登りて見上げたる
 八角三重の国宝の塔

鈴木まさ子

連れもなく独りぼっちの空間に
 包まれるたりはどバスの中

島田ますみ

一面を黄に染めてある菜の花の
 放つ香りにむせかへりそふ

八角 三枝

葉桜の翳なし続く並木道
 心やはらぎ歩み行くなり

斉藤つね子

目覚むれば朝日窓より燦々と
 わが一日のはじまりを告ぐ

高梨 キヨ

腰曲げて養蚕つけて手植えせし
 田植なつかし昭和を生きて来

土屋 好

機械化に農地も大きく区画され
 古来の小字消えて淋しく

伊藤 定男

今春は寒い日多く桜花
 永く楽しめ不思議な思ひす

鈴木 益郎

こうほう 博物館 27

篠本城跡の徳利と杯

平成五年から九年まで発掘調査された篠本城跡からは多くの陶磁器が出土したことは、広報紙3月号で掲載しましたが、今回はその中でほぼ完全な形で出土した徳利と杯を紹介しましょう。

写真中央の器は、口が小さく、肩が膨らんで底へ少しすぼんだ形で、高さ24cm、径15cmを測り、表面全体に薄緑色の釉がかかった瓶子と呼ばれる陶器です。写真手前の二点は、縁が丸く立ち上がった小さい皿で、径10cmほどで、乳白色の生地の縁に薄緑色の釉がかかっていることから、緑釉小皿と呼ばれる陶器です。

これらの焼き物は十五世紀の中頃に、現在の愛知県瀬戸市で焼かれた、当時としては国内唯一の施釉陶器です。瀬戸では平安時代の中頃、それまで作られていた須恵器から中国製磁器をまねて、施釉陶器の生産が始まりました。初めは中国製磁器を写して壺や碗が作られましたが、次第に二丁に合せて様々な形の器が作られ、江戸時代には有

田焼を真似て磁器生産を開始しました。こうして、瀬戸は陶磁器の一大生産地となり、現在では、陶磁器の呼称は「セトモノ」とも言われるまでになりました。

さて、篠本城跡で出土した瓶子と小皿は多数ありましたが、ほぼ完全な形で出土したのは写真の二点のみで、大切に扱われていたことが推測できます。瓶子は、酒徳利として、小皿は普段お酒を飲むときに使われた杯と思われれます。ちなみに客人を招いての酒宴では、酒杯に土器小皿(かわらけ)が使われたことがわかっています。



出土した徳利と杯